

砂場は幼児の樂園

大塚喜一

本誌二月號の拙稿「自他一如」を見て、當時書きたくて多忙のため残したことを述べやう。それは濱寺幼稚園の郊外にあつた「自然の砂場」である。砂遊は小生の子供の時から好きな遊びであるし殊に濱寺では土曜から日曜にかけて日の暮るゝまで遊びつゞけた思ひ出があるので、この日の子供達と遊びつゞお饅頭を作りあつたことは特に心ゆくばかり楽しき生活であつた。その砂を小箱に入れて頂いて歸つたのを、翌日の關西聯合保育會に持參し、名古屋市よりの

「幼稚園の標準設備」の問題に對する實物解答として本問題説明者に手交した。その時その箱の上に記した

「砂場は幼児の樂園で、幼稚園第一の設備である」

なる言は、小生の恩師小西重直先生の御言葉である。過日先生御入浴の機に特に御寸暇を頂き、かねてより小生の

隨喜措く能はざるこのお言葉に就き伺つたところ、「あれは自分が獨逸へ留學の際、童兒の砂に遊ぶ様に感ぜしめられたに起因するので、その光景を撮影したい爲當時は得難かつた寫真機を始めて購入した」。感慨深く語られた。

*

これに關聯して今一つ小生の終生忘れ得ざる感銘は、大阪の久寶幼稚園を訪ふた時の事である。砂場で遊んでゐる幼兒達が二組に分れて高い山を造りつゞあつた。細かいよい砂らしかつたので小生も手に握つて見た。「何作つてゐる」「ミ聲がするので顔を上げるミ、可愛い、年少女兒が親しげに話しかけて呉れてゐる。「お饅頭を作つてゐるが、なかなか出来ないのよ」。ミ話し合つてゐるミ、圓いのを作つて呉れる兒が次から次へミ集つて來る。小生はさうも力の入

れ加減がよくないのかなかく固^{がた}まらない。幾度か仕損じてゐる中に、ふみ小生の側で一人黙々とする一女兒に目をこめた。他の兒の様に盛んに話しかけたり早く澤山作りはしないが、ていねいに一心に作るので圓いきれいなのが出来る。そのお子の手からそれを頂く、砂よりも斯うして作りつゝあるその子の心もちが頂ける様に感ぜられた。それにも、始めて小生が此の様にして子供達の仲間入りさせて頂いた幾年昔の事が思ひ出され、こうした御馳走を頂いて来たのは其後度々であつたのに今日程の滋味を感得出来なかつたのは、實にうっかりしたことであつた。これからこうして子供達から受くる滋味をその心もちのまゝに感得するこゝにより、保育者としての我等の心が育てられて行くであらう。

子供達と我等との眞實の結びつき、その一さきの相互生活により我が内に感得された中味は我が一生の寶となり、たゞ子供達とは形の上で別れる日が來ても、この寶は時を経るにつれて益々我が内心の光となり、子供達と我等とを永遠につなぐきづなとなるであらう。今日小生は幼時に

保育を受けた先生の居らるゝ堺第三幼稚園を訪ひ、新しく入替へられた砂に遊んで湧き上つた感激を急ぎ筆にした。日一日と近づく修了を前にして、先生方と幼兒達との今日此頃の心の結びつきが、永遠のつながりにまで内熟せむことを祈りつゝ特にこの稿を記した次第である。

(昭和十二年二月二十六日 堺にて。)

映畫團樂の會

四月三十日
於軍人會館

晝は午後一時よりお子様方のために

I 家なき兒
II 漫 畫

極彩色漫畫
蟻の一生

III タップダンス

リラ、ハマダ
ニナ、ハマダ

夜は午後六時より御家族皆様のために

I 極彩色漫畫
II 乙女の湖

III タップダンス

リラ、ハマダ
ニナ、ハマダ

IV マツルカ

會員券は一圓及び五十錢でございます。

主催 東京女高師保育實習科卒業生同窓會